

Johannes Quasten : *Patrology* 4 vols.

vol. 1~3 : 1950, vol. 4 : 1986, Christian Classics, Westminster

水 落 健 治

1950年に刊行された Johannes Quasten の *Patrology* は、長らく英語圏における教父学通史・参考図書の標準とされてきたが、著者の病気等の理由によって、著述は第3巻を最後に中断され、続巻の刊行が待たれていた。続巻刊行の計画は Angelo di Berardino を中心とするローマの Augustinianum の教授たちに引き継がれ、1977年に英語版の第4巻に相当するイタリア語版(第3巻)が、そしてこの度(1986年)同巻の英訳が出版された。そこで今回は、この英語版の第4巻を中心に、*Patrology* の全体的構成などにも触れながらこの書の紹介を試みたい。

Quasten の筆になる第1~3巻は次のような構成をとっている。まず第1巻では、序論として教父学に関わる基礎的事項(「教父」および「教父学」の概念、ギリシア語著作とラテン語著作との関係)が簡単に述べられた後、紀元2世紀半ばに至るまでのキリスト教著作家と文書が扱われる。議論は、使徒信条、ディタケーの問題から始まり、殉教者伝、護教家たちの著作、シモン・マゴスに始まるグノーシスの諸文書、そして異端に対する論駁文書がイレナイオスらによって紀元2世紀に出現し始める、その状況が述べられる。

第2巻では、ニケア公会議に至るまでのキリスト教諸学派についての議論が展開される。アレクサンドリア学派(アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネス)、小アジア、シリア、パレスティナの諸学派(アンティオキア学派等)、ローマにおけるラテン・キリスト教文書の始まり(ヒッポリュトス、ノウァティアヌス)、ヒエロニムス以前のラテン語訳聖書の問題、テルトリアヌス、キュプリアヌス、ラクタンティウスらについての議論が、彼らの著書からの長大な引用を随所に挟みながら展開されて行く。

続く第3巻では、ニケア公会議からカルケドン公会議に至るギリシア教父についての考察が展開される。アリウス、アタナシオス、アレクサンドリアのキュリロス、聖

アントニオス、エジプトのマカリオス、ポントスのエウァグリオス、バシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、ニュッサのグレゴリオス、ヨハンネス・クリュソストモス、アンキュラのニルスといった、東方教父の黄金時代に活躍した人々の姿が——正統派・異端の双方を含めて——描き出されて行く。

これらの叙述に一貫して見いだされるのは、〈テキストそれ自体をして語らしめる〉という姿勢である。各著作家についての叙述は基本的に著作毎に区分され、各著作の文献学的諸問題や内容の説明、詳細な参考文献と共に、既存の英訳による本文それ自体からの引用が、きわめて多量に行われている。この姿勢は、たとえばアリウスの場合などのように、本人の著作それ自体が十分な形で残存しておらず、その教説が論駁者等による間接的引用の形でしか知り得ない場合においても一貫しており、著者は、たとえばアリウスの教説を祖述するに際して、その主要な資料を文献学的に分析し、そこから彼の学説を抽出して来る、という手続きは採らずに、アタナシオスの反アリウス文書をそのまま引用し、そのことによってアリウスの姿を——彼に対する反論の状況なども含めて——浮かび上がらせる、という記述方法を採用している (e.g. Vol. 3, p. 12 etc.)。

著者がこのような記述方法を採用したのは、読者が教父の著作に直接触れることによって、教父の著作の「美と荘重さを味わい」、「キリスト教古代の雰囲気を感じし、その世界に入り込むため」(Vol. 1, p. viii) であるという。そして著者はこのような方法を、古代教会史およびキリスト教考古学の教師としての経験から導き出したのだ (*ibid.*)、と語っている。本書の平明かつ生き生きした叙述は、この著者の言葉を実証するかのように、教父ひとりひとりの〈人となり〉と彼らが生きた〈時代〉とについて鮮明な印象を与えてくれる。本書は教父の〈思想研究〉のためにも、〈歴史研究〉のためにも研究者にとっての基礎資料となり得よう。

けれども、今日の教父学の研究状況から見ると、30年余りも前に書かれた本書(1~3巻)には、不十分な点も目につく。たとえば、グノーシスに関する記述においてグノーシスが“this strange mixture of Oriental religion and Greek philosophy”(Vol. 1, p. 254)などと定義されていることは、Messiana colloquium (1966)を踏まえた現在のグノーシス研究からは到底受け入れられないであろうし、ニュッサのグレゴリオスの思想の深みをプラトンやフィロンの影響と単純に見なしてしまうこと (Vol. III. p. 265 etc.) などのように、教父の置かれていた歴史的脈絡をあまりに単

純化してしまういくつかの記述も気になるところである。さらに、教父の各著作に関する参考文献において掲げられてある研究書や論文が1940年代のものまでであるということも、——本書の出版年代からして仕方ないこととはいえ——若干不満の残るところであろう。本書の用いられ方が主に Reference であることを考えると、せめて Appendix のような形ででも新しい文献を掲載してほしかった。

さて、この度刊行された第4巻であるが、ここでは、ニケア公会議からカルケドン公会議に至るラテン教父が扱われている。ヒラリウス、アムプロシウス、ルフィヌス、ヒエロニムスの聖書翻訳、教皇ダマスやノラのパウリヌスらのキリスト教詩、アウグスティヌス及びその関係者（ペラギウスなど）、ゴールの著作家たち（カッシアヌスなど）、レオ1世に至るまでのイタリアの著作家たち等——本巻で扱われるのはこういった人々およびことがらである。したがって本巻は、その序文で Quasten も述べているように、同時代のギリシア教父を扱った第3巻と対をなし、両者あいまって初めて完成するもの（Vol. 4, p. v）とされている。

しかし、このような形式的整合性とは裏腹に、第4巻の叙述は、それまでの巻とはかなり趣を異にしている。このことは本巻序文の次の言葉に端的に現われていよう。

While following in its general outlines the methodological criteria of Quasten, the work (= Vol. 4) attempts to see the Fathers in their political and social context and to give more space to the problematics of contemporary patristic research. (p. vii)

つまり第4巻では、Quasten の方法が大筋では踏襲されるものの、教父達の置かれた政治的・社会的状況が一層重要視される、というのである。

そしてこれを裏書するように、第4巻冒頭には“The Turnabout of the Fourth Century — A Political, Geographical, Social, Ecclesiastical, and Doctrinal Framework of the Century” という1章が置かれ、その中で、紀元4世紀の政治的状況、ラテン教父の政治的関心（ギリシア教父と比較して、教会と国家・政治を分離しようとする傾向にあったこと）、ラテン・キリスト教文化の形成の問題、ラテン教父とギリシア教父との交渉がギリシアからラテンへの一方通行だったこと、政治的状況（ゲルマン民族の侵入）によって東西分裂が促進されたこと、ギリシア・ローマの古典文化がキリスト教文化形成に大きな役割を果たしたこと、教会内での人々の具体的生活、

西方教会独自の修道制の形態の問題などが詳しく論じられる。そして以下の叙述は、8人の著者それぞれの個性を残しながらも、この第1章の“Framework”に従う形で展開されて行くのである。

したがって、第4巻の叙述の姿勢は、1～3巻の〈テキストそれ自体をして語らしめる〉という姿勢とは当然のことながら異なって来る。著作本文からの引用はきわめて少なくなり、その代わりに、教父の姿は膨大な分量におよぶ最新の研究成果を駆使しながら、歴史的に、外割から記述されて行く。たとえばアムブロシウスの生涯に関する記述では、彼がミラノの司教として果たした役割が、ローマ皇帝との関係、アリウス派やウァレンティノス派との教会政治の関係などとの関連において論じられるが (pp. 144-52)、この例などは第4巻の叙述方法の典型的実例といえよう。

この〈歴史的方法〉は、教父の「思想」の扱いにも及んでいる。たとえば、アウグスティヌスの記述では、まず彼の著作の目録が、各著作についての詳細な文献目録と簡単な説明と共に提示され (pp. 356-403)、その後、彼の“doctrine”が、主題毎に整理された形で順序よく述べられて行く (“Reason and Faith”, “Man and God”, “Creation”, “Illumination”, “Trinity”, “Christology”, “Mariology”, “Soteriology” etc. pp. 403-462)。個々の著作の本文それ自体はほとんど引用されることなく、記述本文の註としてただ箇所だけが掲げられるに留まっている。

評者は、本書を読みながら、現代の教父研究が抱える深い問題を垣間見たような気がした。教父を「思想的に」扱うのか (1～3巻)、「歴史学的に」扱うのか (4巻) という問題である。現代の教父学は、もはやかつてのような〈テキストそれ自体をして語らしめる〉という方法のみに固執することは許されないだろう。しかし反面、第4巻において、たとえばアウグスティヌスの思想的営みが、“His doctrinal life passed between fideism and rationalism” (Vol. 4, p. 403) といった言葉で裁断されて行くのを見るとき、何か根本的なものが欠落してしまうような気がしてならないのも事実なのである。「思想研究」と「歴史研究」との間に横たわる溝が、予想を超えて深いものであるということであろうか。

しかし、この大著の資料的価値が大きいことは——1～3巻と4巻とでは資料の性格が異なるとはいえ——改めて述べるまでもあるまい。